

i. 口之島での取り組み

口之島実習生 大瀬良知子 / 久野誓子



はじめに

“時を忘れ、子どもとふれあう”

『モモ』ミヒヤエル・エンデ（1976）」を読んでいると「時間とはすなわち生活だから（Zeitist Leen）」というフレーズが繰り返される。私たちは日頃生活に追われ「忙しい忙しい」と口癖のようにして、大切なことを忘れてはいないだろうか。時間は、みな平等に与えられている。その時間を如何に過ごすかは個人の心に委ねられている。「忙しい」と言訳にすることは、これまで過ごしてきた時間、すなわち生活を意味あるものと捉えていないことになる。教育においても何十人という集団の児童を一つの学級として束ねる際、時間が無いことを理由に一人ひとりを見つめることや学習の定着が出来ないことが問題とされている。こうした問題は、日々当たり前のように繰り返す日常が、根底にある教育の原理を見失わせている。このような問題から打破するためには、時に今置かれた環境とは別の環境へ飛び込み刺激を受けることが必要である。

そこで私たちは口之島という未知との遭遇により、時を忘れ教育の原点を見つめ直すことができる考えた。時を忘れ真に子どもとふれあうことで、教育の本質を捉えることや教壇に立つ者として確固たる志を持つことを目的とした。トカラの教育のあり方は、教えることの原点であり、島独自の教育がある。口之島小中学校で取り組まれている「兼務発令による小中乗り入れ授業」や「へき地学校マルチメディア活用方法研究開発事業におけるテレビ会議システム事業」といった、島ならではの教育研究を捉えること。教師と子どもが一对一で向き合い「個に応じた学習」が日々展開されている環境にふれること。また食育や読み聞かせを通して、郷土を愛する心を育むこと。その上で「個に応じた学習」の本質を捉えようと研修に臨んだ。

1. 口之島について

(1) 口之島の自然とくらし

口之島は、周囲 20 km、面積 13.3 km²、人口 125 人(2006. 7 末)、最高点 628m(前岳)。トカラ列島最北の島であり、鹿児島市から南へ約 204km、北緯 30 度線が、島の北端を横切っている。平家の落人が袂に入れてきたというタモトユリは、県の天然記念物に指定されている。訪れた季節はタモトユリが白く輝く時を過ぎ、その美しさを目にすることはできなかった。海岸は珊瑚礁で、南側は絶壁である。港近くの海岸(平瀬海水浴場)には、珊瑚を削って作られた天然プールがある。このプールは小中学校の体育の授業でも使用している。たくさんの魚と一緒に泳ぐことができる天然水族館。珊瑚は当たるだけで怪我をするので靴を履いて泳ぐことをお勧めする。

島内は車で 1 周すると約 1 時間。現在は工事のため島内を一周することは不可能であった。港から集落までも車がなくてはたどり着けない距離である。山の中を走っていると、7 頭もの野生牛と遭遇し 30 分程立ち往生した。放牧のトカラ牛やトカラヤギと遭遇することができる。また牛の放牧が盛んで、牧場に通じる道路や牧舎がよく整備されている。しかし、集落から少し離れると、道はとても悪くなる。

集落に入ると中心部にはガジュマルの木があり、その下に泉がある。その泉はコウ(湧き水)と呼ばれ、島の人々の水源として大切にされている。人々がコウのそばで会話を楽しんだり芋を洗う姿はまるで日本昔話に出てくるような風景である。また周辺には口之島販売店、自動販売機も 1 台ずつ設置されている。人口規模はトカラ列島の中でも大きい。しかし年代構成は若者が少なく、列島内で最も平均年齢が高く、高齢化が進んでいる。



図 1. 口之島の地図

出典: 十島役場ウェブページ

<http://www1.tokara.jp/contents/profile/kuchinoshima.html>



野生牛



校舎からの風景



記念撮影は赤瀬で



島民が集う泉（コウ）

（２）口之島小中学校の教育体制

在籍数 8 名（小 5 名，中 3 名）。全 8 名中，山海留学生は 0 名，教員子弟は 2 名。学級編成は，小学校低学年クラス（一年生 1 名，二年生 1 名），小学校高学年クラス（五年生 1 名，六年生 2 名），中学校クラス（二年生 2 名，三年生 1 名）の複式学級。教職員は 9 名（小学校 4 名，中学校 4 名，給食調理従事員 1 名）。

平成 10 年度より，文部科学省のマルチメディア活用方法研究開発協力校の指定を受け，3 校共同の研究を重ね，現在も続けている。児童生徒の主體的な学びを支え，基礎・基本の確実な定着を目指した授業展開を実施することをテーマとし，「小中連携：基礎学力の向上に向けての研究」に取り組むなど，極小規模・小中併設校の口之島を生かした特色ある学校づくりの推進などに力を入れている。授業では，教師が小学校と中学校を兼任する小中乗り入れ授業や，全学年合同体育を行う。また，生徒会活動を始め学級活動，特別活動においても小中学校を区別することなく一体となって取り組んでいる。研修期間中には，運動会を間近に控え，連日，全校児童・生徒によって練習が行われた。学校行事は学校だけのものではなく島全体の行事と考えられ，教師や保護者，地域の人々によって教育を盛り上げている。それゆえ，学校と保護者，地域が連携し，地域一体となって学校教育を支えていこうという旨の学校モニター制度を設置している。

口之島小中学校では子どもたちや教師，全員が共通した楽しみを持っている。それは，クラブ活動の金管バンドである。敬老会でも，その演奏が披露された。それぞれが楽器を担当し，みんなで音楽を楽しんでいる。また隠れた魅力の一つに，学校給食がある。パンを含め全て手作りで，毎日出来たての美味しい給食を味わうことができる。いずれも，大規模校では体験するこのできない口之島小中学校ならではの魅力である。



校舎



図書室

2. オリジナル授業

(1) 学習指導案

特 別 活 動 指 導 案



指 導 教 諭： 秋 丸 真 一・有 馬 睦 人
授 業 者： 久 野 誓 子・大 瀬 良 知 子
学 年・学 級： 全 学 級
場 所： 口之島小中学校情報教室（図書室）
日 時： 平成 18 年 9 月 12 日(火)第 4 時限

1. 題材名 「口之島・兵庫 おいしいもの自慢大会」

2. 授業づくりについて

本校の児童生徒は、毎日できたての美味しい給食を食べている。調理する人も知っているので、作ってくれた人への感謝の気持ちを持って味わうことができる。家庭においても、家族で食卓を囲み会話や料理を楽しみながら食事をとっている。また、食料供給の中心が鹿児島本土からフェリーで送られてくる物資であるため、食べ物に対する意識は高い。しかし、実際の調理経験は決して多くはないと思われる。また島という限られた地域の中での暮らしのため、他地域の「食」についてふれる機会も少ない。口之島の郷土料理を知りながらも、その価値に気づくことができない現状にあるといえる。子どもたちは家庭や地域の人々とのふれあいの中で、島に古くからある郷土料理を学んでいる。本題材で取り上げる地域「兵庫県」は、子どもたちにとって未知であり、興味・関心の対象となると考えられる。この題材によって、みんなで食べることの楽しさをより一層実感させるとともに、他地域の「食」にふれることで自分たちの島の「食」に気づき郷土を愛する心を育みたい。

そこで、本題材では「口之島」と「兵庫県」という地域での食の違いに注目させる。口之島は火山島であることから、農耕作には適していない。島の領土の大半を山が占め、集落は島の一つにまとまって畜産と漁業を中心とした生活が営まれている。山で獲れる水芋と餅米を混ぜて作る「水芋餅」。佃煮や春に獲れる筍。魚の保存食である「みがき」。生活の智慧から生まれた郷土料理である。また、美しい海で獲れる新鮮な旬の魚介類を食してきた文化がある。本題材を学習する季節には、伊勢海老が獲れる。一方で兵庫県は、日本の東経 135 度に位置し、神戸を中心とする港町として栄えてきた。明石で獲れる明石タコが特産にあげられ、肉厚のある大タコの干物は人目を引く。漁師が明石で獲れるタコを卵と混ぜて焼いたものが「明石焼き」を生んだ。全国的にも有名な「明石焼き」は、子どもたちも食べたことがなくとも知識にあるだろう。このことから兵庫県の名産には「明石焼き」を用い、その歴史や明石のタコや街の様子を提示することで、口之島との違いを知り地域性があることに興味を持たせる。他地域との比較により、口之島の食生活のよさを気づかせ、口之島の郷土を大切にするという心を育てていきたい。

このように両者の「食」を比較することで特色を捉え、この背景にはそれぞれの風土や文化があ

ることを理解することができる題材である。学習を通して地域の名産を知るとともに、口之島の食生活を振り返り、自分たちの住む島が日本においてどのような地域であるのか把握することができる。また「食」を中心とする子どもたちと授業者の異文化交流の場となり相互理解を深められる。

指導に際しては、口之島と兵庫県の「おいしいもの自慢大会」を、言語コミュニケーションと調理実習の2つの方法を用いて行なう。子どもたちが自分の住んでいる島の「食」を見つめ、背景にある風土や文化、生活を捉えることができるよう様々な工夫をした。授業者の分身となるキャラクター「とも&ちか」を設定し、学習過程がこれらとともに展開される。「食」についての話がより楽しく深まりのあるものとなるように話を楽しむための媒体を設けた。

また兵庫県という異文化を子どもたちがより具体的に理解することができるよう、本題材で用いる教材・教具は本物にこだわって準備した。五感に刺激を与えることで、感受性が豊かに働き思考の活発を促すと考えた。本単元は、自ら働きかけることのできる力を養うことをねらいとして構成している。第一次では、絵本による読み聞かせを行い兵庫について理解させ、自分たちの住む口之島の郷土料理を自分の表現方法で伝えることができるようにする。第二次では、明石焼きを調理することができ、口之島や鹿児島の名産を取り入れ創意工夫して、口之島焼きができることをねらいとする。第三次では、既習事項を基に「元氣玉レシピ」を作成させ、創意工夫した内容を子ども・教師に伝えることができるようにしていきたい。全学級を対象とするため、子どもの発達段階を考慮しつつ全体を包括した働きかけができるように心がける。

各教科の観点 本題材は家庭科（生活科）・社会科（生活科）・国語科の合科学習となっている。各教科別の観点を以下に示す。小学校低学年は、家庭科・社会科は生活科の観点として捉える。

（１）家庭科（生活科） 学習指導要領において家庭科の目標の中で、食生活に関する内容として、「食事への関心」と「簡単な調理」がある。また、「食育基本法」や「食育推進基本計画」、「栄養教諭」などが制定され、学校教育の中で食育活動を行われることが期待されており、「食」を通して「生きる力」を育むことが期待されている。「口之島」と「兵庫県」の食の交流を行い、自分の地域についての食について知り、住む地域の風土や気候によって名産が異なることや地産地消の良さを実感させたい。さらに、今後の生活の中で実践できる調理技術も習得させたい。

（２）社会科（生活科） 全学年において共通して言えることは、自分たちの、身の回りの社会について見つめることが社会科の目標である。発達段階によって、見つめ方は同心円状に拡大する。社会科としては「食」を通して、地域の文化や歴史、地形の違いを捉えさせたい。自分の地域についての食の理解を深め、他の地域の食についても知り、住む地域の風土や気候により地域の名産が異なることや地産地消の良さを実感させたい。

（３）国語科 小学校学習指導要領における国語科の目標のうち、「思考力や想像力及び言語感覚」を養うことに着目する。ここでの「思考力や想像力」とは、言語を手がかりとしながら論理的に思考する力を豊かに想像する力である。これは新たな発想や思考を創造する原動力となるものである。読み聞かせを通して、本が学年を越え親しむことのできるものであることを認識させ、みんなで読むことの楽しさを実感させたい。そのために、子どもたちが親しみをもてるような物語のキャラクターを設定、媒体として絵本やパペット等を用いる工夫をした。また、口之島にある郷土料理について発表することで、「伝える」ことの表現力を高める。同時に発表者の話を「聞く」力を身につけることも意図している。

3. 目標

- 未知の料理「明石焼き」を知ること、口之島と兵庫県の「食」に興味を持つ。[関心・意欲]
- 「食べ物じまんマップ」を活用し、口之島と兵庫県の名産や料理を理解する。[知識・理解]
- 自分の島の「食」を兵庫県と比較し、その特徴を捉えることができる。[思考・判断]
- 自分の島の郷土料理を伝えることや、調理を楽しむ工夫をすることができる。[技能・表現]

4. 題材の流れ（全三次・4時間）



5. 本時の学習

(1) 目標

- ・未知の料理「明石焼き」を知ることで、口之島と兵庫県の「食」に興味を持つ。

(2) 展開

学 習 活 動	教 師 の 働 き か け
1. 食べ物自慢マップで兵庫県と口之島の位置を確認し、本時を知る。	
とも&ちかの住む所にはどんなおいしい食べ物があるのだろう。	
2. 兵庫県の名産品「干しタコ」と有名料理「明石焼き」を知る。 ・物語の中で表される言葉で食べ物を捉える。（「干しタコ」は「おばけタコ」「明石焼き」は「元気玉」） ・「明石焼き」と「たこ焼き」の区別がつかない。 ・実物の「干しタコ」の形や匂いに驚く。	○オリジナル絵本『ともちかの住む所のおいしい話』を読み聞かせ、実習生の住む兵庫の食について大まかな把握ができるようにする。 ・出てきた食べ物について、その場面を再度見せてお話と関連付けられるようにする。 ・「干しタコ（おばけタコ）」の大きさを想像させ実物を提示し、明石のタコに食材を焦点化させる。 ・取材映像『明石探検』を見せて、「干しタコ」が売られている魚の棚商店街の様子や「明石焼き」をリアルに捉えさせる。
 初めて見る干タコ	
3. [中 23・小 56]口之島の郷土料理「みがき」について発表資料を作成し、紹介する。[小 12]タコについて図書室で調べたことを発表する。 ・協力し合いながら活動に取り組む。 ・[小 12] 生きているタコに興味を示す。	○[中 23・小 56]郷土の特徴を気づかせるために、兵庫県の名産品と比べながらまとめさせる。[小 12]タコについて捉えさせるために、生きているタコを調べさせる。 [小 12]・タコの資料を見つけられるように、本の分野や索引方法、キーワードを提示する。 ・タコの特徴を捉えられるように、問いかけをする。
 [小 12] のタコの観察画	 これが「みがき」です ・[中 23・小 56] 紹介の際、パペットを媒体として兵庫県との比較を促すような質問をする。
4. 本時の学習をまとめ、次時の調理実習を知る。	○再度、口之島と兵庫県の特産品を比較することで、「食」に興味を持てるようにする。

(2) 実践報告



タコ調べ



〇〇焼き作りに真剣

楽しみながら創意工夫し考えている様子がうかがえた。改善点として、ワークシートを記入する時間と調理を行う時間の区別をより明確に行うことが挙げられる。



こんな具を入れたよ



食べ物じまんマップ

第一次 口之島の「みがき」、兵庫の「干しタコ」で、特産品を比較することができた。どちらも、人々の生活の知恵から生み出された保存食ということが交流によって明らかとなった。兵庫県の食を紹介するため、授業者をキャラクター化し教材として絵本の作成を試みた。自ら足を運んで用意した教材を用いたことで、子どもたちの具体的な想像に迫ることができた。次時につなぐ導入の役割を果たすことができたが、児童生徒の受身の授業となってしまった。

第二次 児童・生徒は第一次で「明石焼き」について理解しているので、どのようなものかというものは分かっている。しかし、実際に「明石焼き」を作るのは初めての者がほとんどなので、上手く作ることができるのか等、不安があった。ところが、授業が始まると授業者と児童生徒のお互いのペースで授業を運ぶことができた。さらに、「明石焼き」の具材に様々な食材を用意したことで、児童生徒が

第三次 学習のまとめ。第二次の調理実習で予想以上に旨く作る事ができたので、口之島焼き「元気玉レシピ」を作ることにした。これまでの学習を振り返り、一人ひとり工夫してレシピを作成することができたものの、感想発表に時間を多く費やしたため活動時間が少なくなってしまった。そのため、完成した巨大レシピについて全員で見ても共有することができなかった。それぞれの活動における時間配分を常に意識しながら展開することが必要である。

全体を通して 授業者が毎度変わる場合、一授業が独立したものに陥りやすいが「導入・展開・終結」と連動した学習を進めることができた。それは、「食べ物じまんマップ」等の教材を単元全体を通して用いたり、授業者間や指導教諭と何度も打ち合わせを行ったりしたことによる。T・Tを行う場合、教師間の連携が重要な鍵を握ることを実感した。様々な学年と一緒に学習する上での留意点、各学年に

応じた目標や内容等の配慮方法を学んだ。児童生徒が想像以上に美味しい「明石焼き」を考案する等、活動の様子から題材に興味・関心を持って取り組んでいた。全児童生徒がともに助け合い教え合いながら取り組む姿がみられた。また、島の方が伊勢海老を実習のために漁獲してくださる等、地域の協力を得て豪華な食材の並ぶ大規模校では実現することの出来ない実践が可能になった。

3. 研修全体を通して

(1) 研修内容

口之島班は、研修にあたっての打ち合わせを目的とした事前研修（2006年8月23日－8月25日）を実施した。これは他の班にはない研修内容である。ここでは、学校施設のオリエンテーション、実習内容について、詳細な打ち合わせを行なった。また島内を散策しオリジナル授業のための実態調査にあてた。また、子どもたちと珊瑚礁を削って作られた天然プールで泳ぐ等、事前に口之島を把握することができた。

本研修では、口之島小中学校で取り組まれている兼務発令による「小中乗り入れ授業」や「へき地学校マルチメディア活用方法研究開発事業におけるテレビ会議システム事業」の研究等、島ならではの特色ある教育について、講話や見学からその実態を捉えることができた。研修期間中、防災訓練、敬老会、運動会の練習等、様々な活動が催され、積極的に参加した。特に、放課後地域の人たちを含めた運動会の表現運動「ソーラン節」の練習は、踊りを覚える程であった。

実習生・大瀬良知子は、主に小学五・六年生を中心に研修した。子どもの視点から島の教育や生活を考えることに努め、子どもとの関わりを重視した。担当クラスでは、漢字テスト・算数の丸つけ、終わりの会での一言などの活動と一緒にいった。低学年クラスでは、すごろくなど算数の活動と一緒にいった。

実習生・久野誓子は、主に中学部を中心に研修した。教師行動に着目し、校種の差異への対応の在り方や地域の人々との関わりについて、教師側の視点から考えることに努めた。国語科に重点を置き、小学校国語科での複式授業の実習やその他、低学年クラスではパペットを使った読み聞かせなどを行い授業の活動に参加した。

研修全体を通して、オリジナル授業との兼ね合いもあり、「食」を視점에様々な事象を見つめていた。口之島の食文化を知るため、話を聞き、実際に食した。より深い理解を求め、鹿児島県や近隣の島である奄美大島へ足を運び、フィールドワークを行なった。島の方と、調理実習の食材となる伊勢海老の漁獲にも出かけた。自身で得た情報は何よりも強固な学びとなった事は確かである。



教員による敬老会での
「水戸黄門」劇



全校児童生徒・教員で奏でる
「金管バンド」

（２）研修を終えて

口之島に行ったこと、これだけでも私にとっては大きな学びであった。日本地図で一番小さな列島、日本にあれほど小さな島があり、あれほどきれいな海があることを知ることができただけでも、私にとっては貴重な体験かつ学びであった。世界に目を向けることも大切だが、第一に自分が生まれた国に誇りを持ち、その国について知ること、そこで生活をしている人々や文化に目を向けることが大切ではないだろうか。それゆえ、同じ日本に生まれた多くの人たちにトカラ列島のことをもっと知ってもらいたいという思いが強くなった。

この研修を通して教育環境や学校規模について考えることができた。これまで私が知っているのは、出身小学校、阪神・淡路大震災で疎開した小学校、口之島小学校、附属小学校である。これらの小学校では、規模・環境・教育方法等には少し違いはあったが、「知る」ことの楽しさを促すこと、知的好奇心を満たすようにすること、自分が目標を持って努力することなど、自分で生きる力を開いていく教育があった。

子どもたちを捉える時、学校と地域や家庭の関係をよく知っておかなくてはならない。口之島では、島という限られた環境だからこそ、学校―地域―家庭の縮図をよく見ることができた。生活環境は、教育にも関係することを改めて感じた。口之島小中学校の児童生徒は、大多数の意見が行き交うような体験はできない。180人で作るミュージカルも体験できない。しかし、少人数だからできることがある。全校のみんなとバンドが組める。全員で休み時間に遊べる。毎日みんなと会話することができる。海や山の自然とのふれあい、遊びを通してルールの大切さを知ること、少ない仲間だから仲間の行動や言葉を大切にすることなど、少人数だからできることやこの環境だからこそ学べることがたくさんある。教育環境や学校規模について大切なことは、その子どもたちが育っている環境をよく知り、子どもたちにとって一番大事なことは何かを考えていくことだと再認識した。

子どもとの関わり方という観点においても、関わり方には工夫がいると感じた。子どもにいろいろな場面で学ばせるためには、子どもたちの持っている力を知り、それをうまく引き出していかなければならない。少人数ゆえに教師の指導力が要求される。今後このような小規模校に赴任することはないかもしれない。しかし、少人数だからできること、少人数教育の良さは忘れないでいたいと思う。

この研修の後、さらに附属小学校で実習を行い、そこでの目指すべき教育の在り方を絶えず求め続けている教師の姿勢に感動した。また両校の実習を通して、子どもたちが身につけておかなければならない能力は、どのような環境でも同じであることが分かった。どのような環境であっても教育に対する確かな信念を持ち、教育に携わっていくことが大切である。美しい豊かな自然環境の中で学力一辺倒ではなく、生まれ育った環境を大切に自然から学び、子どもとふれあい一緒に遊び、ゆっくりと話しかけ子どもの言葉に耳を傾ける。この姿勢は教師としてどんな時でも忘れてはならない。口之島で出会った様々な人への感謝を忘れず、口之島で学んだ心は教育現場に何らかの形で生かしていきたい。

大瀬良知子

“どこまでも続く海の向こうから、今日の光がやってくる。その光は陰を知らぬかのように希望に満ちている。”

研修中、毎朝校舎からそれを眺めることが私は好きだった。

海や山は私にとって観光やレジャー等、特別な機会でなければふれることのできない貴重な存在。それがすぐ手に届く場所にある事自体、非日常なことであった。ここではそれが日常。だから私は、島の子どもたちが日常の風景とする校舎からの朝日を「もし、自分が島っこだったら。もし、自分が島の教師だったら、島民だったら…」そんな風に、疑似体験をしながら眺めていた。そうすることで、より島の人々の視点に立ち離島教育を見つめようとしたのだった。

私たち口之島実習生は、幸運にも二度の研修機会に恵まれた。一度目は夏休み期間中の事前研修、二度目は本実習である。二度に渡る研修は、この研修航海の軌道を大きく一変させた事は言うまでもない。事前研修は、それまで明確ではなかった島の実態や、受け入れてくださる学校側の実態を捉えることができ、本研修に臨む姿勢、及びオリジナル授業における具体案の確立が可能となった。やはり実際に自分の目で見なければ分からない。人と人との繋がりや互いの目を見て話すことで心が繋がるものだと実感させられた。またこのことは如何に体験活動が子ども達の学習において重要であるか確信する機会となった。真の学びは直にふれることにある。教育者も何を学ばせたいのか真の追究をして、様々なものとのつながりが見えて初めて授業が生まれ、初めて学びが成立する。

研修を終えて、好きだったあの風景の中に子どもたちの笑顔が浮かぶ。この島で得たものは語りきれない。その中で最も大きな収穫は、見失いかけた自分に出会えたことである。

“時を忘れ子どもとふれあう”ということは、教育の原点を見直すことだとか様々な文脈を並べてきたが、自分と向き合うことだった。これまで受けてきた教育や人生を受け止め、教育者としてまず自分と向き合うことが必要だったと感じている。もう二度と創作活動はしないと心に決めていた。夢中になりすぎてしまって足元が見えなくなる自分が怖かったからだ。そうすることで、前へ進むしかなかった。

だが、口之島へ一歩足を踏み入れた瞬間、柔らかな懐かしい風に誘われた。気さくに声をかけてくれる島民の方の温かさ、大自然のゆっくりとした時間の流れ、先生方の情熱、子どもを前にして次から次へと溢れ出る何かがあった。多くの出会いの中でキャラクターが生まれ、心の中で踊り出した。そして、迷いもせず子どもたちのもとへと駆けて行ったのだ。自分をすべてさらけ出さなければ伝わらない、偽りの姿は通用しない。忘れていた自分に出会えたような気がした。もし、口之島のあの8人の子どもたちの笑顔に出会わなければ、そんな自分に再び会うことはなかっただろう。

最後に、民宿のおばあが言ってくれた。島の人たちが言ってくれた。

「ねえちゃん、いつでも帰っておいでよ。疲れたら、来ればいいからね。」

“口之島は私にとって第二の故郷です。”

久野誓子

おわりに

10日間という短い研修期間であったが、口之島で過ごした時間は濃密なものであった。まさに、“時を忘れ子どもとふれあう”という言葉が相応しい体験であった。子どもとふれあい、自然に包まれ、人の温かさにふれる中で、私たち実習生が教育の原点を求めて口之島へ降り立ったのと同様に、ここへ赴任する先生方も教育を見つめ直す機会だと捉えているように感じた。別れの時には、込み上げる熱き思いに涙が溢れた。校庭を後にし尚も続くエールの声は、今もふたりの胸に鳴り響いている。

あのひと夏のかけがえのない体験は、丁度一年前から始まった。トカラ研究会に所属して一年、学業やバイトとの両立等、いろいろな場面で各々が立ちはだかる苦難に厳しいと感じることもあった。この研修を辞退することまで考えることもあった。しかし、同研究会の仲間や友人の支えによって実現することができたのである。あっという間に月日が過ぎ、充実した時間の中で、一生懸命取り組んだ事を評価されることや、NHK鹿児島放送局の取材によって貴重な映像が残される事は自分たちにとって大きな自信に繋がった。今後生きていく上で、また教師として、この経験が糧となることをとても強く感じている。口之島実習生ふたりにとって最高の思い出ができたことも大きな遺産である。



最後に、口之島小中学校の先生方、児童生徒のみなさん、民宿の方、口之島のみなさん、この研修に当たり暖かく迎え入れてくださいました事、厚く感謝申し上げます。

また、NHK鹿児島放送局の古賀昌治記者、教材作成にご協力頂いた兵庫教育大学大学院生のみなさん、多くの方々に助けていただきここまでやり通すことができました。

本当にありがとうございました。

